

# 新島襄の生涯

同志社一貫教育委員会

Wild Rover Project 製作

## 目次

### 第一章 誕生から脱国まで

1. 誕生・幼少年時代
2. 青年時代
3. 函館時代
4. 脱国と洋上生活

### 第二章 アメリカでの留学生活

1. ハーディーとの出会い
2. フィリップスアカデミー時代
3. アーモスト大学時代

### 第三章 ヨーロッパへの旅と抱いた志

1. アンダーヴァー神学校時代
2. ヨーロッパ教育視察
3. アメリカン・ボード年次大会での演説

### 第四章 帰国から同志社英学校開校まで

1. 学校設立に向けて
2. 同志社英学校開校と軋轢
3. 「三十番地」と熊本バンド
4. 「自責の杖」事件

### 第五章 諸学校開校から永眠まで

1. 「地方にも教育を!」
2. 二度目の欧米漫遊の旅と遺言
3. 永眠・葬儀・墓

### 年表

- 付録)
1. 「脱国の理由書」
  2. 「同志社大学設立の旨意」(抜粋)
  3. 「同志社への遺言 10 箇条」

### 参考文献集

## 第一章 誕生から脱国まで

### 1. 誕生・幼年時代

新島襄は1843年2月12日（旧暦1月14日）、江戸の神田にあった安中藩江戸屋敷に生まれました。四人姉妹に続く長男だったので、家族は跡取り息子として大変喜びました。幼名は七五三太で、その由来には二つの説があります。一つは1月14日が正月の松の内の期間内で家にしめ縄が飾られていたので七五三太と名づけられたというもの。もう一つは祖父弁治が喜びのあまり「しめた」と叫んだことから名づけられたというものです。

新島は外で遊ぶことが好きな子どもで、とくに凧揚げに夢中になり、夕食時に家に帰るのを忘れることがたびたびでした。それを戒めるために父民治は凧を取り上げましたが、ひそかに材料をそろえて自分で作りあげるほどでした。ところが8歳の頃にごみ溜めの囲いの上から落ちてこめかみに大けがをしたため、新島は外で遊びまわることをやめて勉学に打ち込むようになりました。

父民治は達筆で祐筆という仕事をしていたこともあり、新島は5歳頃から父に習字を習っていました。10歳になると漢学を学ぶようになりましたが、学問を奨励した藩主板倉勝明は彼の才能を見込んで蘭学も学ばせました。14歳となって元服を迎えた新島は、藩主から父の後を継ぐようにと祐筆補助を命じられました。しかし新島は蘭学に熱中するあまり職務を怠り、わざと藩邸を抜け出して蘭学所に通うようになります。板倉勝明の跡を継いだ弟の勝殷は学問への関心がなく、新島を呼びつけて学問をやめるよう説得しましたが、新島が懸命に学問を続けたいと訴えたため、学問所へ行くことを認めました。

### 2. 青年時代

1860年11月、17歳の新島は軍艦教授所に入所し、ここで教授を務めていた中浜万次郎と出会います。中浜万次郎は土佐の漁師で、1841年出漁中に遭難していたところをアメリカの捕鯨船に助けられてマサチューセッツ州に渡りました。そして、船長のおかげで学校に通って勉学に励み、航海士となって帰国したのです。新島はここで数学、航海術、測量術などを熱心に学びました。

1862年11月、19歳の新島は軍艦教授所で学んだことを認められて、備中松山藩主板倉勝静から玉島航海に参加するよう求められました。新島は備中松山藩の武士たちとともに江戸湾から快風丸に乗り込み、太平洋岸から大阪を経由して玉島までのコースをおよそ2か月かけて往復しました。生まれて初めて外海に出て異文化に触れた新島は、この航海で世界の広さを実感し、ものの見方や考え方を広げることができました。

この頃、新島が通っていた蘭学所の先生が、新島に何冊かの本を貸してくれました。「ロビンソン・クルーソー物語」には海外へのあこがれをかきたてられ、アメリカ合衆国を紹介した「聯邦志略」を読んでアメリカの政治や教育、福祉政策などに驚嘆しました。そして「聖書」の天地創造物語から神の存在を知り、自分は親や藩主よりも神に感謝し、神に従わなければならないと思うようになり、日本を脱国する決意を固めていきました。

### 3. 函館時代

玉島航海から一年後の1864年3月、新島は偶然にも玉島航海で一緒だった備中松山藩の武士たちと出会い、今度は快風丸が箱館に行くことを聞きました。新島は自分もこの航海に同行して箱館に行くことを思い立ち、早速藩主のもとに行って同行を願い出て許可をもらいました。表向きは箱館にある武田塾という学問所に留学するというものですが、内心には海外脱出の夢を抱いていました。

箱館に着いた新島は武田塾を訪ねますが、先生の武田斐三郎は留守で、代わりに塾頭の菅沼精一郎が相談に乗ってくれました。新島は外国人と知り合いになりたいと相談すると、数日後菅沼はロシア人司祭のニコライを紹介してくれました。新島は司祭館に住ませてもらう代わりにニコライに日本語を教えました。その後新島はニコライに海外渡航の夢を打ち明けたのですが、ニコライは協力を断り、思いとどまって自分のもとの勉強するように勧めました。

ニコライに断られた新島は再び菅沼精一郎に相談しに行くと、菅沼は沢辺琢磨を紹介し、沢辺は福士卯之吉を紹介してくれました。福士は元々船大工でしたが、箱館在住のアメリカ合衆国領事から英語を学び、アレクサンダー・ポーター商会で通訳として働いていました。新島はしばらく福士から英語を学んでいましたが、やがて脱国の決意を打ち明け、福士は協力することを約束してくれました。

### 4. 脱国と洋上生活

福士は箱館に寄港していたアメリカ船ベルリン号の船長セイヴォリーと交渉し、新島を船に乗せてもらうことに成功しました。1864年7月17日（旧暦6月14日）深夜、新島は町人に変装して福士の待つ波止場に行き、福士は用意していた小舟に新島を乗せて沖に停泊しているベルリン号を目指しました。ベルリン号で待ち構えていたセイヴォリー船長は新島を船室の物置に匿ってくれたので、翌朝の荷物検査でも発見されず、新島は無事に日本を脱出することができました。

セイヴォリーは新島を、船長付きボーイとして働かせることにしました。最初は給仕や掃除洗濯といった仕事を苦痛に感じましたが、やがて新島は自分でまげを切り落として武士であることをやめました。ベルリン号は上海を経由して長崎に入港する予定だったので、新島はセイヴォリーに、上海で自分を乗せてくれる船を探す

ようお願いします。セイヴォリーは船を探しては断られましたが、ついにアメリカのボストン行きの船を見つけてくれたので、新島は乗り換えることができました。

ボストンを目指すワイルドローヴァー号の船長テイラーは親しみを込めて新島をジョーと呼び、ここでも新島は船長付きボーイとして働きました。新島は乗船のお礼に自分が持っていた長刀をテイラーに贈り、テイラーはそのお返しに英訳聖書をくれました。次に寄港した香港で、新島はテイラーに自分の小刀を8ドルで買ってもらい、書店で漢訳聖書を買いました。こうして新島は念願の聖書を読めるようになったのです。1865年7月20日、ワイルドローヴァー号は無事ボストンに入港しました。

## 第二章アメリカでの留学生活

### 1. ハーディーとの出会い

テイラー船長は船を下りる前に新島にいくらかの小遣いを渡し、新島の世話をしてくれる人を連れてくると約束してくれました。新島は書店で手に入れた英語版の「ロビンソン・クルーソー物語」を読みながら、迎えが来るまでの孤独な日々を耐えました。到着から一か月後、上海まで新島を乗せてくれたセイヴォリーが会いに来てくれました。彼は新島を船に乗せたことで解雇され、長崎からイギリスを経由して生まれ故郷のボストンに帰っていたのです。しかし、セイヴォリーが新島の世話をしてくれるわけではありませんでした。

船上生活を始めておよそ80日後、ワイルドローヴァー号の持ち主であるアルフィーアス・ハーディーがやってきました。何のために来たのかと聞くハーディーに新島は答えましたが、彼の話す英語はハーディーには分かりません。そこでハーディーは新島を船員会館に連れていき、アメリカにやってきた理由を文章で書くことを求めました。新島は二晩徹夜して英語の文書を書き上げました。そこには新島が生まれた頃のこと、蘭学に打ち込んだこと、書物からアメリカを知り、聖書を通して神と出会ったこと、そして学校で教育を受けたいといった願いが綴られていました。ハーディーはこの文書に感動し、彼を家族の一員として受け入れる決意をしました。

### 2. フィリップスアカデミー時代

ハーディーは、新島をどのように助けるかということでは、教育の必要性を一番に考えました。彼は青年期に牧師を目指しながら健康上の理由で断念したこともあり、その後は若者の教育支援に努め、新島がその後行くことになる3つの学校の理事をしていました。1865年10月、新島はアンドーヴァーにある高校、フィリップスアカデミーに入学しました。新島の年齢は21歳でしたが、英語の習得を始めの目的としたのです。この時、汽車というものに初めて乗ったようです。そして、それ以降

新島にかかる一切の費用を、ハーディーは負担することになりました。

本来なら寮に入らなければならなかったところを、新島は英語力がつくまで下宿をすることになりました。ミス・ヒドゥンはフィリップスアカデミー在学時の下宿先の主でした。彼女も「脱国の理由書」を読み、世話を引き受けることにしたのでした。また、下宿先が同じで、アカデミーと同じ敷地内にあるアンドーヴァー神学校に通うプリント夫妻は、新島に丁寧に勉強を教えてくださいました。このように、見ず知らずの自分に出会う多くの人が親切にしてくれることに、新島は驚くのでした。ヒドゥンは教会学校の教師だったので、新島は、しばしばその教会を訪れるようになりました。その後の1866年12月、新島はアンドーヴァー神学校附属教会のバーレットチャペルで洗礼を受けました。

### 3. アーモスト大学時代

1867年9月、新島はフィリップスアカデミーからアーモスト大学に進みました。アーモスト大学では自然科学を中心に学ぶコースに入ることになり、とりわけ地質学に興味を持つようになりました。哲学と宗教の教師であったシーリー教授は、新島が寮に入る前や休暇で寮が閉じた時、病気になった時などに彼を自宅に迎え入れて世話をしてくれました。新島はシーリーの人格を通して、人間として、キリスト者として、教育者としてどのようにあるべきかを学んだのです。そして、そのシーリーも新島を評して、「金にメッキする必要はない」と言い、新島の人格を評価したのでした。

新島のルームメイトは、ホランドでした。彼は大学で最良のクリスチャンと言われた新島と同室になることを望みました。「静かなことハツカネズミのごとく」がホランドの新島に対する評でした。新島とホランドの共通の趣味は、絵を描くことと鉱物採取で、新島とは毎晩聖書を一章ずつ読み、祈り合いました。

新島は1870年7月、理学士の学位を授与されてアーモスト大学を卒業しました。新島はアメリカの大学を卒業した最初日本人となりました。その後、彼の同級生たちは卒業三十年を記念して、新島の肖像画を作成して母校に贈りました。現在もジョンソン・チャペルには新島の肖像画が掲げられています。

## 第三章 ヨーロッパへの旅と抱いた志

### 1. アンドーヴァー神学校時代

アーモスト大学在学中に牧師になることを志していた新島は、1870年9月、アンドーヴァー神学校に入学します。ここで寮生活を送りながら神学を学んでいたところ、翌年の3月、駐米公使森有礼がボストンで新島に会いたいと連絡をしてきたのです。森有礼の計らいで、新島は留学免許状とパスポートを取得することがで

き、これで日本に帰国する道が開かれました。しかし、公費を受け取って政府の束縛を受けることには気が進みませんでした。日本政府は新島に帰国命令を出しましたが、これも、森の働きかけにより神学校を卒業するまで米国に滞在できることになったのです。それは岩倉使節団のために、アメリカの教育制度を説明する役割を新島に担わせたいという考えからでした。

1872年3月、岩倉使節団が多くのことを学ぶために視察訪問に来た時、新島は文部理事官田中不二麿への協力のために呼び出されました。そこにはすでに12名の公費による日本人留学生在がいて、田中に対して、留學生たちは殿様にするような挨拶の仕方をしました。しかし、新島は軽く会釈するだけで、田中も新島に握手だけを求めたのでした。この時、新島は岩倉使節団の仕事を手伝うことを決めました。

## 2. ヨーロッパ教育視察

田中の信頼を得た新島は、アメリカの教育制度の視察のためにアメリカ国内のさまざまな学校を訪問する際の案内や通訳、そして視察報告書の作成を依頼されました。そして、田中からその後のヨーロッパ視察にも同行してもらいたいという依頼を受けたのです。新島はアンドーヴァー神学校を1年間休学することになり、田中文部理事官に随行することになりました。

欧米のさまざまな学校の役割を目の当たりにするうち、政府関係者は日本も教育の制度をしっかりと作らないといけないという考えを持ち始めました。田中は日本の教育制度を整えるためには新島の協力が必要だと感じ、一緒に帰国することを望みました。しかし、新島はアンドーヴァー神学校での学びを再開することを決めていたのでこの申し出を断りました。この時すでに新島は、日本にキリスト教主義学校を設立する夢を抱いていたのです。

## 3. アメリカン・ボード年次大会での演説

ヨーロッパからアメリカに戻った新島は、宣教師としてアメリカン・ボードから大阪に派遣されていたゴードンから手紙をもらい、帰国してその働きを手伝ってもらいたいという要請を受けることとなります。神学校を終えて牧師資格を得た新島は、アメリカン・ボードから宣教師として日本に派遣されることになりました。

1874年10月、バーモント州のラットランドで開催されるアメリカン・ボード第65回年次大会で、新島は挨拶をすることとなっていました。グレイス教会の1000人ほどの満員の聴衆の前で彼は、自らに起こった奇すしき御業のことを語り、そして、祖国がいかにキリスト教に基づく教育を必要としているかを強くアピールし、寄付を募ったのです。多くのものがそれに賛同し、最終的に総額5000ドルほどが集まり

ました。その中で一人の農夫が帰りの電車賃を節約し、その分の2ドルをささげてくれたエピソードは、後世まで語り継がれることとなりました。新島は基督教の伝道と学校設立という思いを持ちながら、日本へと向かったのです。

#### 第四章 帰国から同志社英学校開校まで

##### 1. 学校設立に向けて

脱国してから 10年後の1874年11月26日、新島は横浜港に降り立ちました。その翌日、人力車を三台借りて安中に向かった新島は、江戸から故郷に帰っていた家族との再会を果たしました。そして、約一か月の安中滞在後、新島は関西に向けて出発します。大阪、神戸にはアメリカン・ボードの宣教師たちがすでに活動をしていたからです。早速新島は開校許可を得るために大阪に向かいました。しかし、当時の大阪府知事の渡邊昇はキリスト教主義を掲げることを許さなかったため、断念せざるを得ませんでした。次に向かった京都府知事の榎村正直は、新島の申し出を前向きに受け入れ、協力者として山本覚馬という人物を紹介してくれました。

当時、山本覚馬は京都府顧問という要職につき、植村とともに産業の育成や教育の推進に力を入れていました。山本覚馬はもともと会津藩の武士でしたが、幕府側として鳥羽・伏見の戦いに参加し、失明した後京都にあった薩摩藩邸に捕らえられました。しかし、そこで側近に筆記させた新政府宛での建白書（『管見』）が高く評価され、釈放後も京都に留まり、京都の近代化に尽くすことになりました。新島の話聞いた山本覚馬はその学校を京都に作ることを勧め、しかも自分が持っていた土地を提供してくれました。

こうして 1875年8月、新島は山本覚馬と連名で京都府に「私塾開業願」を提出し、アメリカン・ボードの宣教師デイヴィスが最初の教員として加わることになりました。ところが、開校のうわさを聞きつけた仏教の僧侶や神社の神官たちによる排斥運動が起きたため、校内では聖書を教えないということを京都府に誓約しなければなりません。

##### 2. 同志社英学校開校と軋轢

1875年11月29日午前8時、新島の借家で行なわれた祈祷会から「官許同志社英学校」が始まりました。「志を同じくする仲間たちが集う結社」である同志社は8人の生徒と2人の教師（新島襄と J. D. デイヴィス）からなる小さな小さな一滴でした。「あの朝、開校に先立って新島が自宅で捧げたあのやさしい、涙にみちた、まじめな祈りを私は決して忘れることはできない」と、デイヴィスは後に執筆した新島の伝記（『新島襄の生涯』）に記しています。

新島の考えに賛同していた京都府顧問山本覚馬から既に購入していた旧薩摩藩屋敷跡の土地（現・今出川校地）に、翌年9月には二つの校舎と一つの食堂が建てられました。「切支丹邪宗門禁制」の高札が取り外されてはいましたが、まだまだ僧侶や神官たちの反発は凄まじいものでした。投石やヤジに包まれる中、北隣は相国寺、南隣は御所という、仏教と神道の狭間での、困難な船出でした。

### 3. 「三十番教室」と熊本バンド

開校するときに、「校内では聖書を教えない」という内容の誓約書を交わしていたので、最初は新島の自宅で聖書の授業が行なわれていました。旧薩摩藩屋敷跡に校地を移すと、道を隔てた校外にある豆腐屋を購入して聖書の授業が行なわれました。この最初の神学館ともいべき廃屋は、「三十番教室」あるいは「イングランド」と学生たちに呼ばれていました。熊本では、藩がアメリカから L.L. ジェーンズを招いて洋学校を開校しました。しかしキリスト教に共鳴した 35 人が熊本市花岡山の山頂に集まり、キリスト教の精神で社会に仕える決意表明書に署名をしました。周囲は衝撃を受け、激しい迫害が起こり、1876 年 9 月に洋学校は廃校となってしまいました。L.L. ジェーンズの紹介で、学びの場を失われた学生たち約 40 人を同志社英学校は受け入れ、余科（神学科）を設置して「三十番教室」で聖書講義が行なわれました。この若者たちは、のちに「熊本バンド」と呼ばれました。

### 4. 「自責の杖」事件

同志社開校5年目の1880年3月、事件が起こりました。教師会は1878年9月に入学した学生のクラスと1879年1月に入学した学生のクラスを一つにして授業を行うことを決めました。この決定に不満を持った上級生たちは「御伺書」を提出して、学校の姿勢を問いました。やがて無断欠席というストライキにまで発展しました。1880年4月13日の礼拝で、新島は「集団欠席という校則違反は彼らの罪でも幹事の罪でもない。校長である自分の落ち度であり不徳のいたす所である。よってその校長を罰する」と語って、携えてきた杖が折れるほどに左手を打ち続けました。

その中にいた学生の一人である徳富猪一郎（蘇峰）は、この「自責の杖」事件の後に退学しますが、やがて文筆家として活躍していきます。そして退学後も献身的に新島の同志社大学設立運動に参加し、「同志社大学設立の旨意」作成のために大きな働きをなし遂げました。

## 第五章 諸学校開校から永眠まで

### 1. 「地方にも教育を！」

新島は、さまざまな地域にキリスト教主義学校ができることを夢見ていました。1886年には、宮城県に宮城英学校を設立して自ら校長となりました。

「SEEK TRUTH AND DO GOOD（真理を求め善を為せ）」というモットーを掲げて、翌年には東華学校と改称されましたが、新島が亡くなった後（1892年）に廃校となってしまいました（今も仙台二華中高校の校舎外壁にはこのモットーが掲げられています）。1889年には群馬県に共愛社が設立され、新島も発起人の一人として名前を連ねています。

また、精神的な面だけでなく肉体的な面からも人々を救いたいとの思いから、医学にも注目していました。アメリカン・ボードの医療宣教師であったJ.C.ベリーと相談して、1887年、同志社病院と京都看病婦学校を設置しました。ベリーが病院長、新島が看病婦学校の校長になりましたが、財政難のため1897年に病院が、1906年に看病婦学校が閉鎖されました。2015年に開設された同志社女子大学看護学部という形で新島の思いが引き継がれました。

### 2. 二度目の欧米漫遊の旅と遺言

1884年4月5日、新島は「第二次欧米漫遊の旅」に出かけました。静養を目的とした旅行でしたが、大学設立資金を募り、キリスト教についての理解を深める旅となりました。イタリア滞在中、ローマ法王に面会したいと思いましたが、「法王の前にひざまずいて敬意を表わすこと」が義務づけられていたために断念したそうです。「私の膝は法王の前で曲げるには余りにも固すぎる」と、権威や権力に対して反骨心あふれる新島でしたが、自分の志である大学設立のためには、あちこちで頭を下げて献金を募りました。

こうして、1888年11月には「同志社大学設立の旨意」が全国の新聞、雑誌に掲載され、発表されました。1889年11月28日夜、群馬での募金活動に走り回っているさなかに、激しい腹痛に襲われました。神奈川県大磯の百足屋にある離れ座敷を借りて静養していましたが、1890年1月17日には「急性腹膜炎」の診断を受け、妻の八重が到着したときには危篤状態でした。1月21日早朝、同志社の未来図、将来への希望などについての遺言を口述で伝え、徳富蘇峰が筆記しました。

### 3. 永眠・葬儀・墓

新島は、1890年1月23日午後2時20分、46歳11ヶ月の地上の生涯を終えました。初めての東海道汽車旅は、遺骸としての旅でした。京都駅到着は深夜のみ

ぞれが降り注ぐ中でしたが、600人以上の同志社、教会関係者に出迎えられ、街灯もなくぬかるんだ道を交替で担がれ、自宅へと辿り着きました。1月27日には同志社礼拝堂で葬儀が行なわれ、棺を担いだ約3000人の行列は、若王子山頂の墓まで続きました。

若王子山頂にある同志社共葬墓地の墓碑には、友人勝海舟の友情あふれる書体で「新島襄の墓」と刻まれました。妻八重さんや家族、宣教師たちの墓碑もたくさん並んでいます。その墓地の入り口、しかも新島襄の墓石に向かい合う場所には松本五平の墓石がたたずんでいます。同志社の作業員として長く勤め、学生達が「五平、五平」と呼び捨てで仕事を命じる中、新島は「五平さん」と「さん付け」で仕事を頼んだと伝えられています。「襄」と呼びかける妻八重に対して「八重さん」と語りかけた新島の姿を思い起こさせるエピソードです。

新島は遺言の中で、「いやしくも教職員は学生を丁重に扱うこと」と述べています。新島が全ての人を「さん付け」で呼ぶ姿からは、一人一人を大切にす姿勢がうかがえます。この言葉には、名前を呼び合うように、丁寧に学生の人格と向き合い続けて欲しいとの新島の願いが込められています。

#### 同志社一貫教育委員会 Wild Rover Project メンバー

デビッド・フォアマン: 同志社中学校・高等学校

振本ありさ: 同志社小学校

川江友二: 同志社中学校・高等学校

森田喜基: 同志社大学

中川好幸: 同志社小学校

大岡創一朗: 同志社中学校・高等学校

桜井希: 同志社中学校・高等学校

山下智子: 同志社女子大学

#### 前メンバー

木村良己: 同志社中学校・高等学校

## 新島襄の生涯と同志社、国内外関連歴史年表

1843(天保 14)	旧暦 1 月 14 日、江戸安中藩上屋敷で生まれる。幼名、七五三太。	水野忠邦失脚により天保の改革が終わる。
1853(嘉永 6)	安中藩学問所に入り添川廉斎に漢文を学ぶ。剣術や武術のけいこも始める。	ペリー来航。 翌年、日米和親条約。
1856(安政 3)	安中藩主板倉勝明の命で田島順輔に蘭学を学ぶ。	
1857(安政 4)	安中藩主板倉勝明が死亡し、弟勝殷が跡を継ぐ。	翌年、日米修好通商条約。
1860(萬延元)	藩主の護衛役として初めて上州安中に行く。 幕府の軍艦操練(教授)所にて、数学、航海術を学ぶ。	桜田門外の変。
1861(文久元)	軍艦操練(教授)所で生徒中世話役を務める。無理な勉強で目を傷める。	リンカーン、アメリカ大統領に就任。南北戦争 (~65)。
1862(文久 2)	眼病のため軍艦操練(教授)所退学。甲賀源吾の塾で兵学、測量等を学ぶ。 翌年にかけて備中松山藩の洋式帆船快風丸で浦賀から玉島までを往復。	坂下門外の変。和宮降嫁。生麦事件。
1863(文久 3)	蘭学の他に英語を学び始める。	薩英戦争。八・一八の政変。
1864(元治元)	安中藩庁より、箱館の武田斐三郎の塾に 1 年間入門の許可を得る。 快風丸で箱館に入港。ロシア領事館付司祭ニコライ神父に日本語を教える。 米国船ベルリン号に乗り込み脱国。上海で米船ワイルド・ローヴァー号に移る。 船中でテイラー船長にジョーと名付けられる。 香港で漢訳聖書を購入する。	禁門の変。第 1 次長州征討。
1865(慶応元)	ワイルド・ローヴァー号、ホストン港に入港。船主 A・ハーディー氏に脱国の理由書を提出しハーディー家に引き取られる。 フィリップス・アカデミーに入学する。	第 2 次長州征討宣言。
1866(慶応 2)	アンドーヴァー神学校教会で洗礼を受ける。	
1867(慶応 3)	フィリップス・アカデミー修了、アーモスト大学に入学。	
1868(明治元)		薩長連合。大政奉還。 王政復古の宣告
1869(明治 2)		戊辰戦争 (~69) 。五箇条の誓文、五榜の掲示、アメリカ大陸横断鉄道開通。東京遷都。版籍奉還。
1870(明治 3)	アーモスト大学卒業、アンドーヴァー神学校入学。	
1871(明治 4)	ワシントン駐在少弁務官森有礼とボストンで出会う。 森有礼より、渡海留学免状とパスポートが新島襄に郵送される。	廃藩置県。郵便開業。 ドイツ帝国成立。

1872(明治 5)	岩倉全権大使使節団への協力を要請される。 教育視察の通訳を依頼され、アメリカ各地を視察。翌年にかけて田中不二麿理事官らとともにイギリス、スイス、ロシアなどヨーロッパ各地を視察する。	学制公布。 新橋横浜間鉄道開通。
1873(明治 6)	アンドーヴァー神学校復学のためニューヨークに戻る。	徴兵令。 キリスト教黙認、禁制の高札撤去
1874(明治 7)	牧師資格を得る。アンドーヴァー神学校を卒業する。アメリカン・ボード年会の演説で寄付金 5000 ドルを得る。	民撰議院設立建白。
1875(明治 8)	学校用地として京都にある旧薩摩藩邸跡を 550 ドルで購入。11 月 29 日、官許同志社英学校を開校する。	立憲政体樹立の詔。
1876(明治 9)	山本八重と結婚する。A・J・スタークウェザーが女子塾を開設。	廃刀令。翌年、西南戦争。
1880(明治 13)	同志社の朝礼の席で、「自責の杖」事件が起こる。	国会期成同盟。
1882(明治 15)	「同志社大学設立之主意之骨案」を書き終える。 「同志社学校設立ノ由来」を起草する。	
1883(明治 16)	「同志社設立始末」を起草する。	
1884(明治 17)	英国船キヴァ号でヨーロッパへ渡り、イタリア各地を見学する。 サンゴタール峠で呼吸困難に陥り、峠のホテルにて遺言書を書く。	
1885(明治 18)	A・ハーディー氏に少年時代を記した文章を贈る。	内閣制度発足。
1887(明治 20)	父民治が亡くなる(81 歳)。	翌年、市制・町村制発布。
1889(明治 22)	A・ハーディー氏、敗血症のため死去(71 歳)。	
1890(明治 23)	前橋の臨江閣で演説する。宿所に帰ってから腹痛を起こす。 八重夫人、徳富猪一郎、小崎弘道、立会いのもと遺言を述べる。 1 月 23 日、急性腹膜炎のため死去(46 歳)。 同志社礼拝堂(チャペル)前で葬儀。遺体は生徒たちにかつがれて若王子山に埋葬される。	大日本帝国憲法発布。 第 1 回帝国議会開会。 教育勅語発布
1891(明治 24)	墓碑銘を勝海舟が認める。	

付録) 1. 私はなぜ日本を脱国したのか (脱国の理由書) 1865年10月

私はある藩主〔板倉勝明〕の江戸藩邸で生まれた。父〔新島民治〕は藩邸内で書道の師匠と祐筆をつとめていた。祖父も藩主に仕える身で、全体〔足軽など〕を取締る執事だった。私は6歳から日本の古典と漢籍を学び始めたが、11歳の時、それまでの考えを一変させて剣道と馬術を習い始めた。16歳の時、漢籍を学びたい気持ちが高まったので、剣道などはやめてしまった。

けれども藩主は私を日誌記録係に抜擢した。しかし、それは私がやりたくなかった仕事だった。私は1日おきに藩邸の執務室に通わなければならなかった。そのうえ自宅で父に代わって男の子や女の子らに書道を教えなければならなかった。そのため漢学塾に通って漢文を勉強することはできなかった。けれども本は毎晩自宅で読んでいた。

ある日、友人がアメリカ合衆国の地図書〔『連邦志略』〕を貸してくれた。それはあるアメリカの宣教師〔E・C・ブリッジマン〕が漢文で書いたもので、私はそれを何度も読んだ。その本で大統領の選出、授業料無料の公立学校や救貧院、少年更生施設、工場などを建てることを知って、脳みそが頭からとろけ出そうになるほど驚嘆した。そこで私は、わが国の将軍もアメリカの大統領のようであればならないと思い、こうつぶやいた。

「ああ日本の将軍よ、なぜあなたはわれわれを犬や豚のように抑圧するのか。われわれは日本の人民だ。かりにもわれわれを支配するのならば、あなたはわれわれをわが子のように愛さなくてはならない」と。

その時以来私はアメリカのことを学びたいと思うようになった。しかし、残念なことにそれを教えてくれる教師はひとりもいなかった。私はオランダ語を勉強したくはなかったけれども、私の国ではオランダ語を読める人が多かったから、それを勉強せざるを得なかった。そこで私は蘭学を学ぶために教師の家に1日おきに通った。

ある日、私は藩邸の執務室に出ていたが、記録することは何もなかった。そこで執務室を抜け出し、蘭学教師の家に行った。やがて藩主が私に会いに執務室に来られた。ところが誰もそこにいなかったの、藩主は私が戻ってくるまで待っておられた。私に会うなり藩主は私を殴りつけた。「なぜ執務室を抜け出したのか。ここから逃げ出すとはもってのほかだ」。

10日後に私は再び逃げ出したが、藩主には気づかれなかった。しかし、残念にもその次に逃げ出した時には見つかってしまい、殴られた。「おまえはなぜここから逃げたのか」と尋ねられたので、私は答えた。

「外国の知識が学びたかったのです。外国のことをできるだけ早く理解したいのです。ですから執務室に詰めて、お殿さまが決められた規則を守らなくて

はならないことは承知しておりますが、私の心は勉強のためにすでに先生の所に行っております。それゆえ私の体もまたそこへ行かざるを得なかったのです」と。

すると藩主は非常にやさしくこう言われた。「おまえは習字が上手だからそれで生計を立てていける。2度とここから逃げ出さないならば、俸禄を増やしてやってもいい。どうしておまえは外国の知識などにあこがれるんだ。それは道を誤るもとだ」と。

私は言った。「どうしてそれが道を誤るもとになるのでしょうか。誰でも何らかの知識を持つべきだと思います。知識を全く持たない人は犬や豚にひとしいと思います」と。それを聞いて藩主は高笑いをして「おまえはしっかりしている」と言われた。この件では藩主のほかにも祖父、両親、姉たち、友だち、隣人たちが、私を殴ったり、嘲笑したりした。しかし、私は彼らのことを全く気にせずに自分の考えを堅持した。

2、3ヵ月後、執務室での仕事が増えたので抜け出せなくなった。ああ、これが原因で私はあれこれと思い煩い、病気にもなった。誰にも会う気がせず、遊びに出たい気持も起こらなかった。ひたすら静かな部屋にこもっていたかった。ひどい病気だと分かったので、薬をもらいに医者の方へ行った。医者は念入りに私の病気を診察した後でこう言った。「君の病気は心が原因だ。高ぶった気持ちをまずすっかり静めるようにしなければいけない。身体のためには散歩をする必要がある。散歩のほうが薬をたくさん飲むよりもはるかに効き目がある」と。

藩主は病気を治すために時間をたっぷりくださり、遊ぶために父も金をいくらかくれました。しかし、私はオランダ語を学ぶために毎日教師の家に通った。長時間を費やしてオランダ語の文法書を読み終えてから自然科学の小冊子にとりかかった。この本は大変面白かったので、医者の方のくれた薬よりもずっとよく私の病気に効いたと思う。

2、3ヵ月後に病気が良くなると、藩主は再び私を抜擢して日誌記録の仕事を命じられた。藩主の命令に従って、私は毎日執務室に詰めていなければならなかった。ああ、もうオランダ語の勉強のためにそこを抜け出すことができない。私は仕方なく自宅で夜間に時間をかけて本を読んだ。そして蘭和辞典をたよりに例の自然科学の本を読み終えた。けれども悲しいことに夜の勉強のために目を傷めたので、またもや勉強を中断せざるを得なくなった。

10週間たつと目の病気が完全に回復したので、再びその本を読み始めた。けれども計算式でわからないところがあったので、算術を学びたいと思った。しかし、そのための時間は全くなかったからある日藩主に「勉強のためにもっと時間をください」とお願いした。そこで藩主は週3回私が執務室から抜け出す

ことを許可してくださったが、私にはまだ十分とはいえなかった。私はある算術の塾に通って足し算、引き算、掛け算、割り算、分数、利息算などを修得した。その後、例の自然科学の本を再読すると計算式の部分がよく理解できた。

ある日、私は海が見たいと思って江戸湾に行った。そこで私はびっくりするほど大きなオランダ軍艦を見た。それは私には城か砲台のように見えた。この船は敵と戦えば強いだろう、とも思った。この船を眺めていると、ある思いが頭にひらめいた。私たちは海軍を作らなくてはならぬ、との思いである。なぜなら、わが国は周囲を海で囲まれており、もし外国から攻撃を受ければ、海上で戦わなくてはならないからだ。

しかし、別の思いも浮かんできた。外国人が貿易を始めてから諸物価があがり、わが国は以前よりも貧しくなった。日本人は外国人と貿易をする方法を知らないから、私たちは外国に出かけて貿易の仕方を覚え、外国に関する知識を学ばなくてはならない、との思いである。

ところが国法は私の思いを全く無視したので、私はこう叫んだ。「幕府はなぜ私の思いを無視するのか。なぜわれわれを自由にしてくれないのか。なぜわれわれを籠の鳥か袋のネズミのようにしておくのか。そうだ、われわれはそんな野蛮な幕府は倒さなくてはならない。アメリカ合衆国のように〔国民が直接選挙で〕大統領を選ばなくてはならない」と。しかし悲しいかな、そのようなことは私の力のおよばないことだった。

その時以来、私は幕府の軍艦教授所〔軍艦操練所〕に週3回通って航海術を学んだ。何ヵ月もかけて、代数学や幾何学が多少分かるようになり、航海日誌のつけ方や太陽の高度の計り方、緯度の測り方なども修得した。けれども悲しいことに夜間の勉強のせいでまたもや目を悪くし、1年半ばかりというもの、全く勉強ができなくなった。こんなことは人生に2度と起きてほしくない。目が良くなると、藩邸の執務室にまた詰めざるを得なくなった。

江戸はそのころ非常に暑くて、病人が多く出た。日中、太陽がじりじりと照りつけたある日、夕方に大雨が降った。その時私は寒気がしてぞくぞくしてきた。翌朝には頭痛が始まり、体内で火が燃えているかのように身体がほてってきた。何も食べられず、冷たい水を飲むだけだった。2日後には麻疹ぶらぶらと過ごす時間が多くなった。

ある日友人を訪ねると、彼の書齋で聖書を抜粋した小冊子を見つけた。それはあるアメリカの宣教師が漢文で書いたもので、聖書の中のもっとも重要な出来事だけが記してあった。私はそれを彼から借り、夜に読んでみた。なぜなら聖書を読んでいることが知れると、幕府は私の家族全員を磔にするので、私は野蛮な国のおきてを恐れていたからだ。

私はまず神のことが理解できた。すなわち神は天と地を分けたうえ、光を

始めとして草木や鳥獣、魚などを〔次々と〕地上に創造された。神はご自身の姿に似た形に男を創り、そして彼の脇腹の骨を切り取って女を創られた。神は宇宙のすべてを創造した後で休まれた。その日を私たちは日曜日または安息日と呼ばねばならない。

次に私はイエス・キリストが聖霊のみ子であること、その方は全世界の罪のために十字架につけられたこと、それゆえ私たちはその方を私たちの救い主と呼ばなくてはならないことを理解した。そこで私はその本を置き、あたりを見まわしてからこう言った。「誰が私を創ったのか。両親か。いや、神だ。私の机を作ったのは誰か。大工か。いや、神は地上に木を育てられた。神は大工に私の机を作らせられたが、その机は現実どこかの木からできたものだ。そうであるなら私は神に感謝し、神を信じ、神に対して正直にならなくてはならない」と。

この時から私の心は英語の聖書を読みたいという思いに満たされたので、箱館に行って、イギリス人かアメリカ人の聖書の教師を見つけようと決意した。そこで藩主と両親に対して箱館に行かせてほしいとお願いした。しかし、彼らは許してくれず、私の願いに大変驚いた。彼らは私をこんこんと諭したが、私の固い決意は変わらなかった。私は自分の願いを持ち続け、神に向かって、「どうかお願いですから志を達成させてください」とひたすら祈っていた。

それから私はある日本人の教師から英語を習い始めた。ある日、江戸の街中を歩いていると、私の知人で私を可愛がってくれていた洋式帆船〔快風丸〕の船長〔船員の加納格太郎〕に突然出くわした。「船はいつ出るのですか」と聞くと、「3日以内に箱館に向けて出帆する」とのことだった。「連れて行ってもらえますか。お願いですから行かせてください」と言ったところ、「連れて行ってもいいが、君のお殿さまとご両親がお許しにならないだろう。まずそちらに頼むことだ」と彼は答えた。

2日後、私はいくらかの金と少しばかりの衣服、それにわずかな書物とをたずさえて家を出た。もしこの金がなくなったらどうやって衣食をまかなうのかを考えることもなく、ひたすらこの身を神のみ手にゆだねた。

翌朝私は箱館行きの洋式帆船に乗りこんだ。箱館に到着して適当な英語の教師を探したが、八方手をつくしても見つけれなかった。そこで私の心は一転して、国外脱出を考えるに至った。

しかし、私はためらった。祖父や両親を悲しませるだろう、との思いがあったからだ。その思いがしばらくの間私の心を捉えた。けれどもやがて別の考えが頭にひらめいた。それは、私は両親から生まれ育てられたが、本当は私は天の父のものである。それゆえ私は天の父を信じ、その父に感謝し、そしてその父の道を進まなくてはならない、という考えである。こうして私は日本から

連れ出してくれる船を探し始めた。

あれこれ苦労した末に、私は上海行きのアメリカ船〔ベルリン号〕に乗りこんだ。上海の河口に到着ののち、ワイルド・ローヴァー号に乗り換え、約8ヵ月間中国沿岸を往来した。神に守られて、4ヵ月間航海したのちボストン港に着いた。

初めて〔同号の〕H・S・テイラー船長に〔上海で〕会った時、「もしアメリカに到着したら、お願いですから学校に行かせてください。よい教育を受けさせてください。そのため私は力の限り船内で働きますし、あなたから賃銀をいただくつもりもありません」とお願いした。船長は「帰国したら学校に通わせてやろう。そして船内では私の使用人として働かせてやろう」と約束してくれた。船長は金銭こそ支給してくれなかったが、衣服や帽子、靴、その他のものを買ってくれた。船中では航海日誌のつけ方、緯度、経度の測定の仕方を教えてくれた。

当地〔ボストン〕に着くと、船長のおかげで長い間船内にとどまることができた。その間私は船を守る荒くれた不信心な船員たちと一緒にだった。港の人は誰も彼も次のように言って私をおどした。「南北戦争以後、物価があがったので、陸の上ではおまえに救いの手を差し伸べてくれる者など一人もいないぞ。残念だが、もう一度海に戻るしかない」と。

私は衣食のために相当働かなくてはならないとも思った。学校に納める金を稼ぐまでは、とうてい学校には入れない。そのような考えにとりつかれると、私はあまり働く気が起こらず、また本も楽しく読めなかった。精神に異常をきたした人のように長時間ただあたりを見回すだけだった。毎晩、ベッドに入ってから「お願いですから私をみじめな境遇に追いやらないでください。どうか私の大きな志を成就させてください」と神に祈った。

それから私は船の持主であるハーディーさまが私を学校へ送り、経費を一切出してくださるかもしれないことを知った。船長からこのことを初めて聞かされた時、私の両眼は涙にあふれた。氏への感謝の気持ちが大きかっただけでなく、神は私をお見捨てにならない、と思ったからである。

## 付録) 2. 同志社大学設立の旨意」1888 年 11 月

### 1. 同志社英学校の設立

今やわが国は社会の秩序が破れ、規律が乱れ、人心は向かうべき方向が分からない状態である。輝くような文化の光を今日の日本に実現しようと思えば、どうしても欧米文化の根本である教育に力を注がねばならない。思うにわが三千余万の同胞の安全と危険、不幸と幸福とは、単に政治の改良によるのではなく、また物質的文明の進歩によるのでもなく、まさにもっぱら国民を教化する力しだいであることを確信する。

### 2. キリスト教に基づく徳育

その目的はただ単に普通の英学を教えるだけでなく、徳性を磨き、品性を高尚にし、精神を正しく強めるように努め、ただ技術や才能のある人物を育成するだけでなく、いわゆる「良心を手腕に運用する人物」を生み出すことに努めてきた。しかもこのような教育は、一方に片寄った知育だけでは決して達成できるものではない。またすでに人心を捉える力を失っている儒教主義が行えることでもない。

それはただ神を信じ、真理を愛し、他者に対する思いやりの情に厚いキリスト教の道徳によらなければならないと信じて、キリスト教主義を徳育の基本とした。

### 3. 私立大学の目的

教育事業をことごとく政府の手に任せてしまうのが得策であるとは私たちは思わない。仮にも国民たる者が自分の子どもを教育するのは、まことに国民の義務であり、決して避けてはいけないことであると信じる。そして国民が自ら手をくだして〔私学〕教育を行うならば、それは国民としての義務を果たすだけでなく、その事業は親切に安価に活発にそして周到に行われて、行き届くはずである。このことは、「自分のことは自分で行う」という原則に照らして見れば明白であり、決して疑ってはならない。

### 4. 私立大学の特性

政府の手で設立された大学が実に有益なのは疑いない。けれども国民の手で設立された〔私立〕大学が、まことに大きな感化を国民に与えることも事実である。もとより資金の多さや施設が完備している点から見れば、私立は国立とは比較しようがない。けれども学生が自分独自の気質を発揮し、自治、自立の国民を養成する点は、これこそ私立大学が持っている特性であり長所である、と

信じて疑わない。

教育は実に一国の一大事業である。国民がこの一大事業を無頓着にまた無気力にただ政府の手にだけ任せておくのは、依頼心のもっともはなはだしいものであって、非常に嘆かわしいことである。およそ一国の文化の源は、決して短期間に生じたものではない。

#### 5. 教育の弊害

教育というものは人間の能力を発達させるだけでなく、あらゆる能力をまんべんなく発達させるようにしなければならない。いかに学問や技術が優れていても、その人間が意志の弱い人物であれば、一国の運命を担うべき人物とは決して言えない。もしも教育方針の的が外れているために一国の青年を歪んだ鋳型にはめこんで片寄った人物を養成するようなことがあれば、教育はその国を滅亡させると言うべきであろう。

#### 6. 一国の良心

一国を維持するのは、決して二、三の英雄の力ではない。実に一国を形成する、教育があり、知識があり、品性の高い人たちの力によらなければならない。これらの人たちは「一国の良心」とも言うべき人たちである。そして私たちはこの「一国の良心」とも言うべき人たちを養成したいと思う。私たちの目的は実にここにある。

諺にはこうある。「一年の謀（はかりごと）は穀物を植えるにあり。十年の謀は木を植えるにあり。百年の謀は人を植えるにあり」。

思うに私たちの大学設立のような事業は、実に国家百年の大計であり、なんとしてもとりかからねばならない事業である。

「現代語で読む新島襄」丸善 2000 年 (P. 213~225 より抜粋)

### 付録) 3. 遺言 1890年1月21日

(1890年1月21日午前5時半、新島八重子、小崎弘道、徳富猪一郎が立ち会った遺言の箇条)

- 同志社の将来はキリスト教による徳育、文学や政治などの興隆、学芸の進歩、これら三者を一体的にまた相互作用的に行うこと。
- 同志社教育の目的は、神学、政治、文学、自然科学などいずれの分野に従事するにせよ、どれもはつらつたる精神力があつて真正の自由を愛し、それによって国家につくすことができる人物の養成に努めること。
- いやしくも教職員は学生を丁重に扱うこと。
- 同志社では個儻不羈(てきとうふき)なる書生を圧迫しないで、できるだけ彼らの本性にしたがつて個性を伸ばすようにして天下の人物を養成すること。
- 同志社は発展するにしたがつて機械的に事を処理する懸念がある。心からこれを戒めること。
- 金森通倫氏を私の後任とするのは差しつかえない。氏は事務に精通し、鋭い才気の点では比類ないが、教育者として人を指導し、補佐する面では徳がなく、あるいは小細工をしやすいという欠点がないとは言えない。この点は私がひそかに残念に思うところである。
- 東京に政法学部、経済学部を設置するのは、最近の事情を考慮すれば、とうてい避けることができないと信じる。
- 日本人教師と外国人教師との関係についてはできるだけ調停の労をとり、両者の協調を維持すること。これまで私は何回も両者の間に立って苦勞した。将来も教職員の皆さんが日本人教師にこのことを示していただきたい。
- 私は普段から敵をつくらぬ決心をしていた。もし皆さんのなかであるいは私に対してわだかまりを持つ人がいるならば、そのことを許していただければ幸いである。私の胸中には一転の曇りもない。
- これまでの事業を見て、あるいはこれを私の功績とする人がいるかもしれない。けれどもこれは皆、同志の皆さんの援助によって可能になったことであり、自分ひとりの功績とは決して考えてはいない。ただ皆さんのご厚意に深く感謝する。

「現代語で読む新島襄」丸善 2000年(P.252~253)

<参考文献表>

- 同志社大学社史資料センター「新島遺品庫」(同志社アーカイブス)  
新島襄;新島襄全集編集委員会編『新島襄全集 1～10 巻』同朋舎 1983～1996 年  
J.D.デイヴィス『新島襄の生涯』同志社大学出版部 1992 年  
同志社編『新島襄 その時代と生涯』晃洋書房 1993 年  
現代語で読む新島襄編集委員会編『現代語で読む新島襄』丸善 2000 年  
本井康博『新島襄と建学精神』同志社大学出版部 2005 年  
同志社編『新島襄の手紙』岩波文庫 2005 年  
同志社編『新島襄 教育宗教論集』岩波文庫 2010 年  
同志社編『新島襄自伝』岩波文庫 2013 年  
和田洋一『新島襄』岩波書店 2015 年  
新島襄への扉編集委員会編『新島襄への扉』日本基督教団出版局 2006 年  
同志社大学編『新島襄検定 100 問』らくたび文庫 2008 年  
本井康博監修『マンガで読む新島襄』同志社大学 2008 年  
本井康博監修『続マンガで読む新島襄』同志社大学 2010 年  
同志社大学良心学研究センター編『新島襄 365』同朋舎 2019 年  
同志社大学良心学研究センター編『同志社精神を考えるために』同朋舎 2023 年



1. 生誕の地碑 安中藩江戸屋敷で生まれる



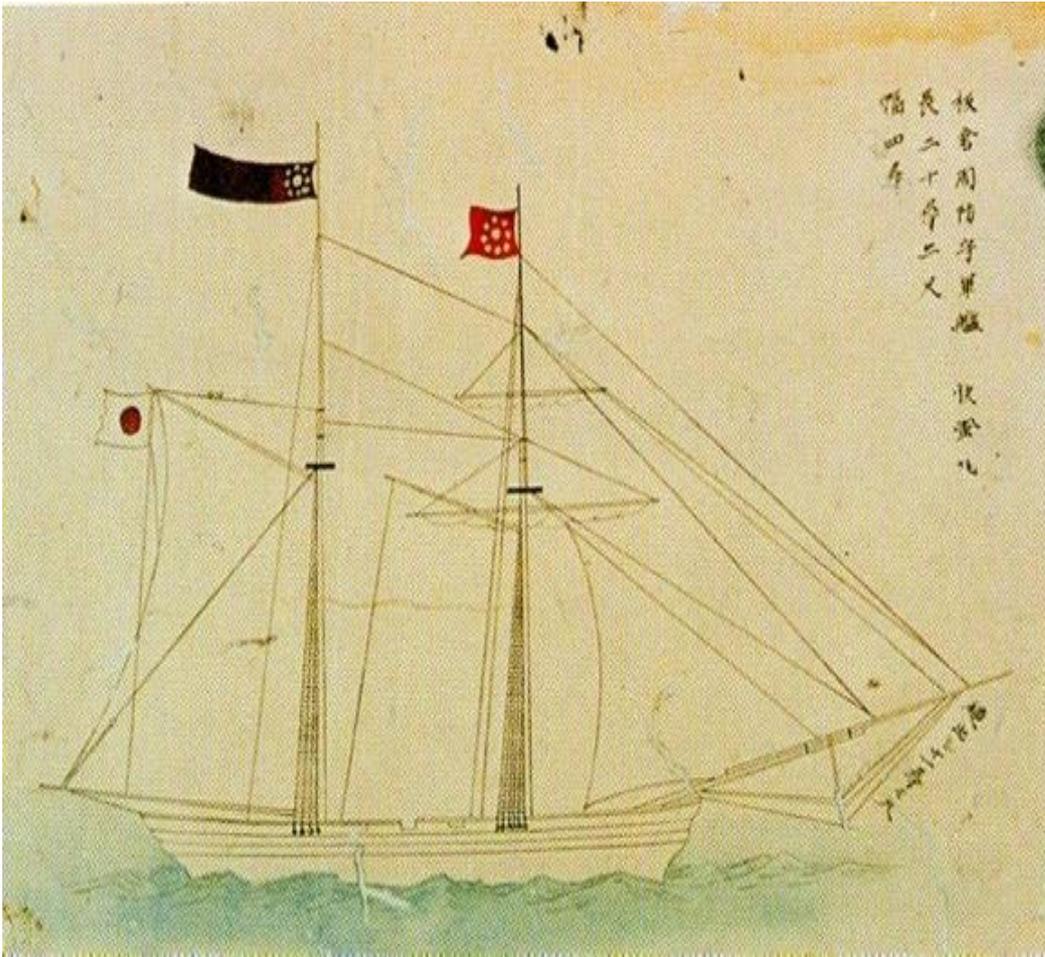
2. 新島襄の両親(民治・とみ)後年  
新島襄が帰国後両名とも、洗礼を受けた。



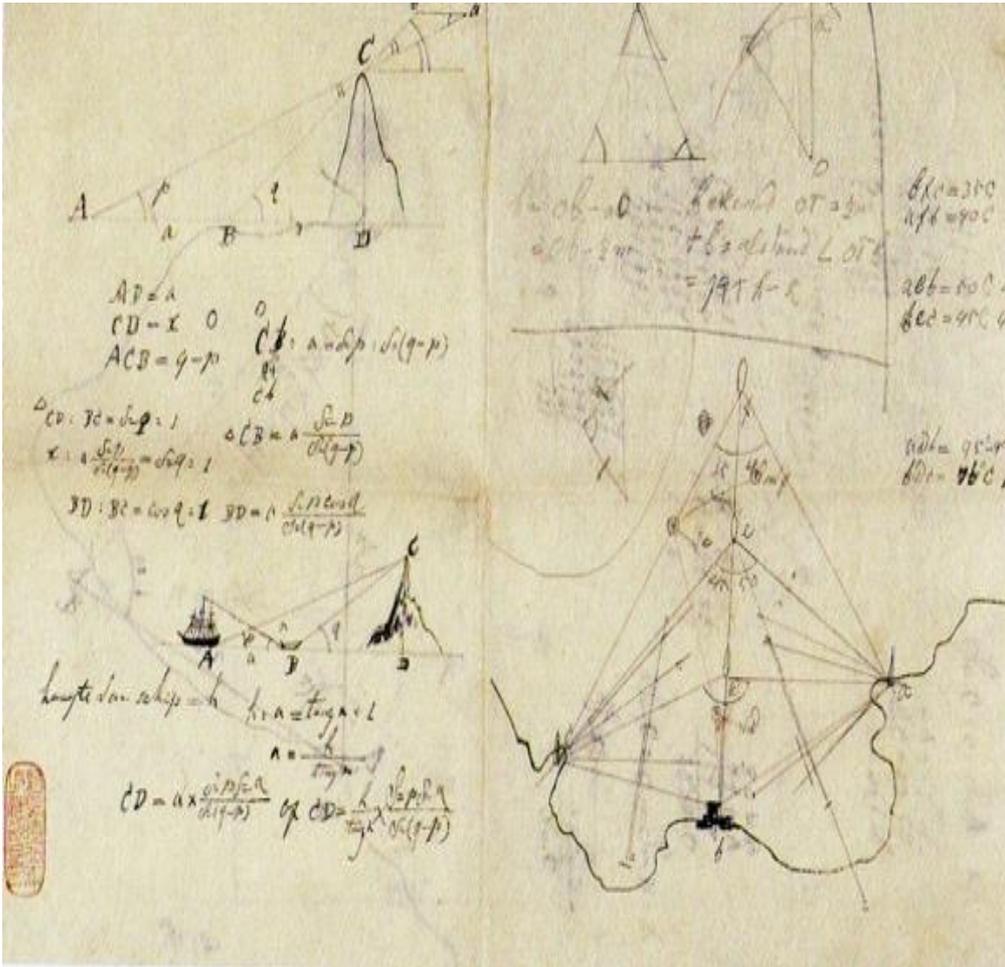
3. 中濱万次郎 土佐の漁師 漂流し、アメリカで学んだ後帰国、軍艦教授所で教える



#### 4. 玉島航海と箱館航海の航路



5. 快風丸 玉島航海で2度乗ったこの船で、箱館へ向かうこととなった



6. 蘭学学習時代のノート



7. 聯(連)邦史略 新島が影響を受けた書物 大統領制についての記述に感銘を受けた。



8. ニコライ 新島のアメリカ行きには反対した。



9. 函館ハリストス正教会 写真は、現在の建物である。ハリストスとはロシア語でキリスト。



10. 福士卯之吉 貿易会社に勤め、  
新島のアメリカ行きに協力する。



11. セイヴォリー ベルリン号船長 福士から新島襄の渡航を手助けすることを依頼される。後にこのことが発覚し、解雇された。



12. 新島の脱国扮装 アーモスト大学在学中、級友の求めに応じて再現



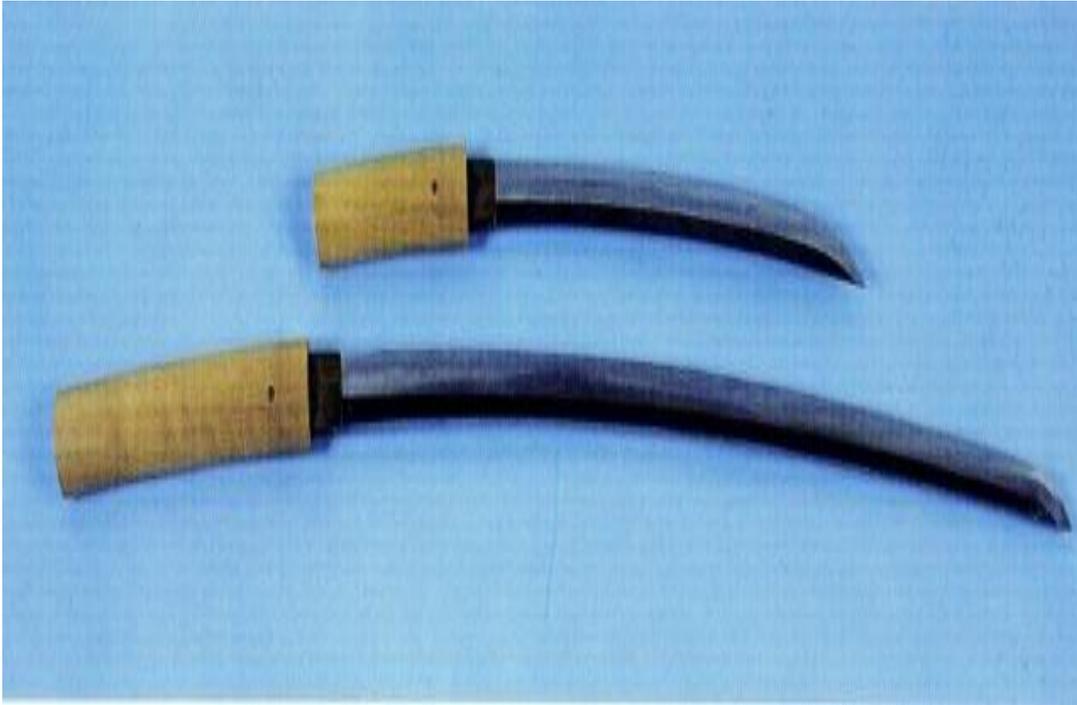
13. 新島襄海外渡航乗船之处碑 福士卯之吉の助けによりここからベルリン号に向かった。



14. ワイルドローバー号 上海よりインド アフリカ大陸南を通り、約1年をかけて  
ボストンに到着した



15. テイラー ワイルドローバー号船長 新島に Joe という名前を与えた。



16. 脱国時に携えた刀 新島が脱国時にもっていた現物



17. ハーディー夫妻 アルフィーアス&スーザン ワイルドローヴァー号船主 アメリカでの父母 現存する元の住居



18. ジョンソンチャペル(アーモスト大学)両側の建物が新島も生活した  
学生寮 授業ノート チャペル内には新島襄の肖像が掲げられている



19. ジュリアス・シーリー アーモスト大学教授 新島の恩師



20. North Hall 新島が生活した寮



21. W・J・ホランド アーモスト大学時代のルームメイトのひとり



22. アンドーヴァー神学校 フィリップスアカデミーと同様 アンドーヴァーにある神学校



23. 岩倉使節団 新島は通訳を頼まれたが、他の留学生と違った行動をとった。



24. グレース教会 帰国前の挨拶をし、募金を募った教会



25. 山本覚馬 京都府顧問 八重の兄 同志社という名称を考案した



26. 同志社英学校 最初の校舎(写真左) 右は第二寮



27. J.デーヴィス 宣教師として来日 同志社の最初の教員の二名のうちの一人



28. 聖書の教室(三十番教室)正課での聖書の授業が禁じられたので、新島は1876(明治9)年に英学校の隣りにあった豆腐屋の廃屋を個人名義で買い入れた。



29. 熊本洋学校 ジェーンズ邸



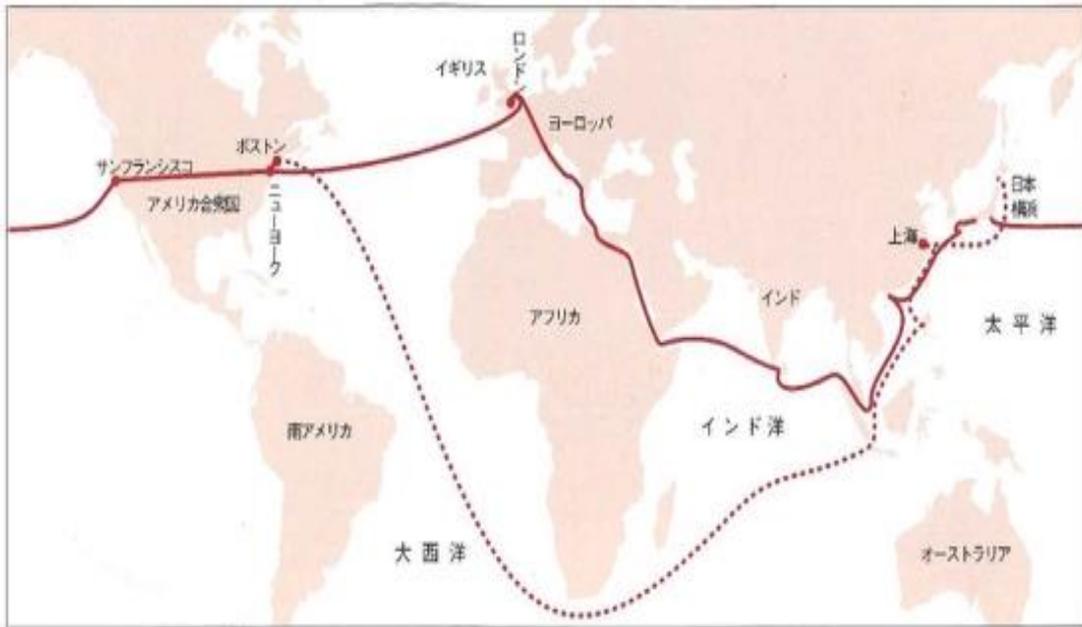
30. 自責の杖 同志社社史資料室に保存されている



31. 徳富蘇峰(猪一郎)熊本バンド出身 退学後も新島襄と交流し、遺言を書き写す。(徳富蘇峰記念館資料)

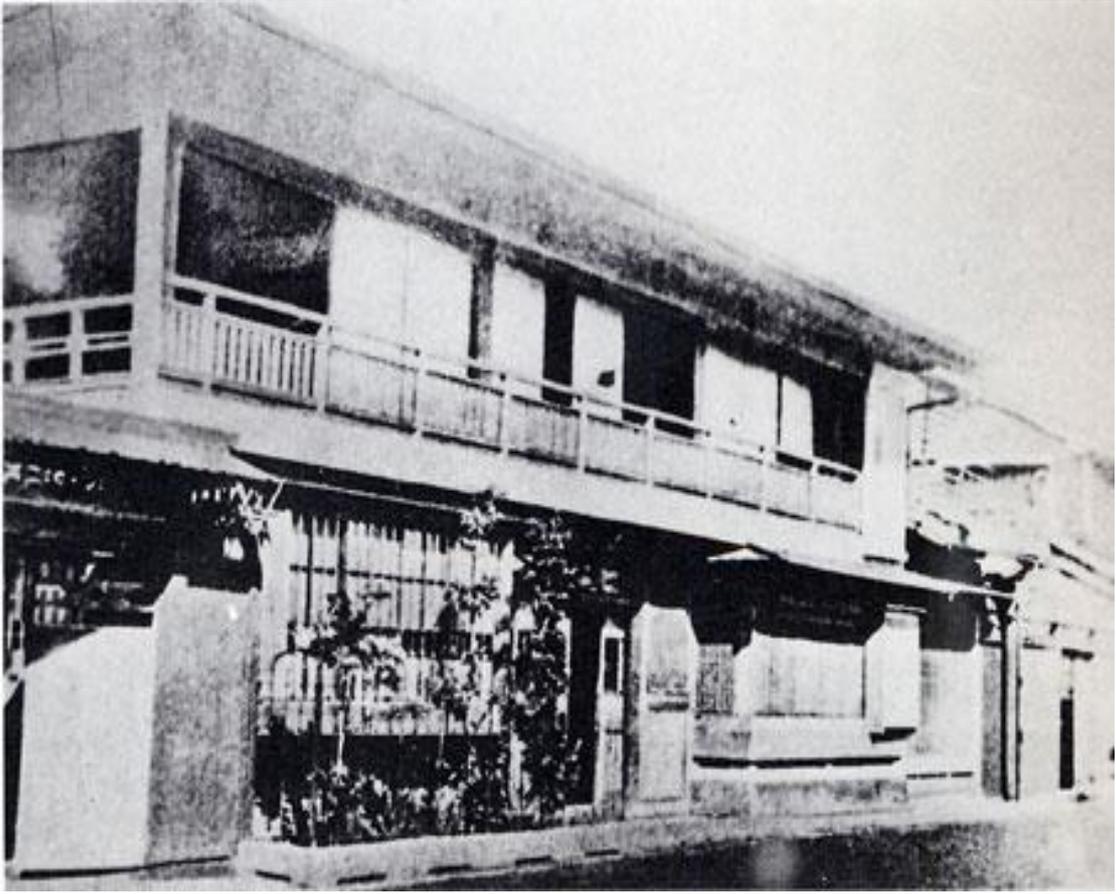


32. 同志社大学設立の旨意書 新島は大学の設立を生きて迎えることはできなかった。



224. .... 脱国したときの航路(1864~1865) — 2度目の航路(1884~1885)

### 33. 第二回外遊航路



34. 百足屋旅館本館(神奈川県大磯)



35. 新島襄・八重夫妻 1876(明治9)年1月3日デイヴィスの司式によりキリスト教による結婚式をあげて間もない頃の  
新島襄・八重夫妻



36. 新島襄臨終図 その後の同志社にとって重要な遺言を徳富蘇峰が書き取る。



37. 勝海舟 幕末から明治期の重要人物の一人、新島を評して、「私」のない人間だと言った。



38. 新島襄の墓 現在の墓石は二つ目のものになり、ラットランドから取り寄せられた。



39. 松本五平の墓 死んでもおそばにいたいという希望をかなえ、後日同志社墓地に建立された。